



ああ、
パウカー！
またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文
Tajiro Miyazaki
(バーゼル交響楽団首席ティンパニスト)

追想の「マエストロ・カラヤン」

連載・第6回

少年カラヤンフアン誕生

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE《Eidola: KNAUHKROS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

一九八八年の今年は、カラヤン
生誕九十年。つまり生きてい
れば九十才だが、亡くなった
のは一九八九年の夏だから、あれから
すでに九年が過ぎていく。

一方、私がカラヤンアカデミーの学
生として、ベルリンフィルとともにカ
ラヤンをインテンシヴに体験したのは、
一九八〇年前後の約四年間だから、そ
れからはなんと二十年近くの歳月が流
れており、今カラヤン体験を語ること
は、私がクラシック音楽に目覚めた少
年の頃、往年のクラシックフアン達が、
フルトヴェングラーやワルター、トス
カニーニなどの昔日の巨匠達について
感慨深げに語っていたのと、ひよつと
したらニューアンスの近いものがあるの
かも知れない。

しかし、いまだき「カラヤン体験」
などと言っても、なにしろ御人は、ク
ラシック音楽界における稀代のスーパ
ースター。その前人未到の膨大な量の
仕事を通して、それぞれの「カラヤン
体験」をした人は、この世にたくさん
いるはずだし、彼について書かれた伝
記や評論の類も、いまだに出版され続
けて後を絶たない。その上、大の親日
家で、カラヤンと関係の深かった日本

人も数多いが、そのなかでも、ベルリ
ンフィルの団員としてカラヤンの指揮
下で長年仕事を共にし、その内幕も知
り尽くしている土屋さん（ヴィオラ）
と安永さん（コンサートマスター）の
「カラヤン体験」が、おそらく名実とも
に一番内容が濃いはずだ。

というわけで、本当は私ごときがあ
えて「カラヤン体験」をご披露するの
は僭越の至りなのだが、それはまた別
として、もしカラヤンがこの世に存在
していなかったら、少なくともヨーロ
ッパでパウカーの仕事をしている現在
の自分はなかった……という少なから
ぬ因縁を持ち合わせている身としては、
こころあたりで「ある打楽器奏者が体
験したマエストロ・カラヤン」といつ
た感じで、現在の自分に深くかわる
個人的なカラヤンの思い出や、当時の
ベルリンフィルにまつわるお話を書
き綴ることぐらいは、おそらくお許
しいただけると思う。

私

のカラヤン体験は、まだ小学
生の頃、当時の白黒テレビで、
ビクターだか三菱だかのステ
レオの宣伝用に使われた、カラヤンと
ベルリンフィルによるベートーヴェン

の田園交響曲の「嵐の場面」の演奏に
始まる。

いま思うと、モノラル放送のテレビ
でステレオのオーディオ装置の宣伝と
いうのも変だが、そんなこととは関係
なく、その演奏は子供心に強力なイン
パクトを与えた。

あの嵐の場面の「ガーン」という
衝撃的な最初のフォルティシモの和音
が茶の間のテレビで鳴り響くと、それ
までテレビを観ながら食事をしていた
父親の箸の動きが止まり、台所を行き
来していた母親が首をテレビに向け、
子供の私は、いきなり何やらもの凄く
深刻な迫力に鳥肌が立ち、嬉しいよう
な怖いような、ワーツと叫んで走り出
したいような衝動を抑えて、テレビの
画面に見入った。

そこには、鬼のような形相をして嵐
のように弾き狂うベルリンフィルの弦
楽器奏者の大群の中心に立ち、目を閉
じてなにもかに取り憑かれたように
細かく痙攣しながら指揮をする、神秘
的なカラヤンの姿があつた……。

その後、中学のブラスバンドで打楽
器を始め、クラシック音楽にも目覚め
て、自宅にあつた父親のレコードコレ
クションを引っ張り出して聴くように

なり、クラシック入門者のご多分にも
れず「運命、悲愴、新世界」といった
ヒットパレード的名曲に胸を熱くした
が、その時のレコードは、ロイヤルフ
イルをケンペやレイボヴィッツが振つ
たものとか、ロンドン響とマルケヴィ
ツチといった、今思い出しても録音が
良く、しかも正確でダイナミックな名
演奏だった。しかし、世の中には同じ
曲目でもさまざまな演奏がある、とい
うことを知り、ある日、小遣いを貯め
て、とりあえずかの有名な指揮者「カ
ラヤン」のレコードを初めて買った。
カラヤンは、ご存じのように一九六〇
年代の終わり頃の当時でさえ、同じ曲
目の録音をすでに何回も繰り返しとい
たが、そのとき私が手にしたものは、
新世界（一九四〇年の一番古い？録音
オケはベルリンフィル）と悲愴（フィ
ルハーモニア管）を表と裏にギツシリ
詰め込んだ廉価盤で、音質が悪いうえ
にレコードの真ん中近くに針が進むと
（つまりフィナーレの盛り上がりで！）
フォルテで音が割れてしまう、という
シロモノだったにもかかわらず、特に
新世界には、そういう音質を通して
ちやんと聞こえてくるロマンティッ
クな響きと、スケールの大きな表現に感



カラヤンとベルリンフィル（1960年代頃の写真と思われる）。

動した。そこでたちまち少年カラヤンファンが一人出来上がり、もつと音のいい方の新譜レコードが聴きたいと思つたが、高価でとても手が出ないので、せめてレコード店でタダでもらつたカラヤンの等身大のポスターをアイドルよろしく自分のベッドの天井に張り付けて、その、忍者が印を結ぶようにして、右手で持った指揮棒を左手で握り込んでじつと祈っているスタイルに決めたカラヤンを、朝夜となく眺めて暮らした。

世にいうアンチカラヤンという人類に初めて出会つたのも、この頃だ。

ある日ブラスバンドのトロンボーン
の友人の家に遊びに行った時、大学受験で浪人中のクラシック音楽ファンの彼の兄とレコードの話になり、私が

「カラヤンの新世界がいい」と言うのと、

「待つてました！」とばかりに、それはもう無茶苦茶にカラヤンのことをコキおろしたうえに、「そんな墮落したモノじゃなくて、新世界の決定盤はこれだ！」とその場で聴かされたのは、なんとバーンスタインとニューヨークフィルのレコードだつたが、それは驚くほどギラギラした録音で、演奏もどことなく乱暴で妙ににぎやかな軽い感じがとても好きになれず、「カラヤンの方がずっとありがたい感じがするなあ。それにしても、カラヤンのいつたいどこがダラクしているのだろうか？」と、彼についてその演奏以外は何も知らなかつた私は、ただ不思議にそう思った。そして大分の音楽高校で音楽の道をめざして勉強を始めた頃、決定的な事

件が起きた。

それはNHKホールの落成記念のために来日したカラヤンとベルリンフィルによる特別公演（一九七三年）で、毎回違うプログラムによるコンサートの中継が毎晩のように続けて全国放送され、地方の音楽ファンにとつては前代未聞のこの大イベントを残らず見聴きするために、勉強などそつちのけでテレビやラジオにかじりついて興奮したが、なかでも特にブルックナーの七番のテレビ中継の印象は強烈だつた。

数えたらなんと十本も並んだコントラバスを土台にした重厚きわまりない弦楽器セクションと、その響きもルックスも豪華絢爛たる管楽器セクション、なかでも映画スターのよ

うにハンサムな金髪のトランペット奏者達（カラーテレビです）や、うら若い天才的なフルート奏者（バユではありませんよ。プラウです）などの活躍が眩しいほど美しく、それらをまとめあげるカラヤンは、相変わらず神秘的で集中力に漲っており、そして舞台後方の中央ティンパニの席には、頭の上まで高々とバチを振り上げて、今までに見たこともない猛烈なスピードでフルティッシモのロールを叩き続けるフォーグラ先生（の勇姿があつた）。

「将来きつとドイツへ、そしてベルリンへ行つてティンパニの勉強をするのだ」

（つづく）

武蔵野音楽大学選抜学生による 室内楽の夕べ

フランス：木管五重奏曲 第1番（1948年）

スザート：ルネサンス舞曲集

パーシケッティ：パストラル 作品21

ブルックナー：弦楽五重奏曲 へ長調 WAB112 他

1998年11月19日（木）7:00 p.m. 東京オペラシティリサイタルホール

京王新線（都営新宿線）初台駅下車

入場料＝2,000円（全自由席）

入場券取り扱い●チケットぴあ・チケットセゾン・武蔵野音楽大学演奏部窓口

お問い合わせ●武蔵野音楽大学江古田校舎演奏部 03-3992-1120

主催●武蔵野音楽大学



ああ、
パウカー！

またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文

Taijiro Miyazaki
(パーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」 夢のベルリンへ！

連載・第7回

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE《Eidola: KNAUHKROS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

カ

ラヤンとベルリンフィルのテレビコンサートを観た音楽志望の高校生が、カーツと頭に血を昇らせて「ドイツへ、そしてベルリンへ行くのだ！」と勝手に一人で心に決めても、いまずぐに九州の田舎から直接、というほど世の中は甘くなく、それなりの準備が必要なのは当然で、そのためにはまず日本で音楽の基礎をしつかり固めてから、というワケで、東京へ出て国立音大へ入学した。

国立音大では、ブラスオルケスタや打楽器アンサンブルなどの盛んな活動を通して、初見演奏やステージ体験、休止小節の数え方とか間違えた時のゴマカシ方などの合奏の要領の他に、舞台裏の人間関係の図式とか付き合ひ酒の飲み方のテクニクまで、プロの音楽家になるための必修科目を三年ばかりみっちり叩き込まれたが、そんなある日、米日中のベルリンフィルによるカラヤンアカデミーのオーディションが、日本で行われる話しが舞い込んできた。

「すわっ」

ちょうどその頃、当時のベルリンフィルのティンパニ奏者で作曲家のテ

リヒエンのティンパニ協奏曲を学期試験でやつたばかりだったので、これを幸い持ち曲にして東京の予選を通してもらい、数日後、本選のある大阪フェスティバルホールへ向かった。

カラヤンの直接審査によるオーディションは、こちらが想像したのとは裏腹に、とてもリラックスした雰囲気で行われた。

まずテリヒエンの第三楽章を演奏したが、これがカーツ前後の聴かせどころまでやらせてもらえずに早々と切られてしまい、この曲のためだけに東京から同行したピアノ伴奏者といっしょにかなり気落ちしたが、カラヤンが聴きたいのはオーケストラスタディが中心らしく、こちらにはたつぷり時間がかけられた。

始めはベルリンフィルの団員といっしょにホールの中央あたりに座っていたカラヤンが、ステージの前まで少し不自由らしい片足を引きながらゆつくりと歩いて来て、ステージの上の私を見上げてにっこりと微笑み、

「ベートーヴェンの第九！」

と指示する。通訳はベルリンフィルの安永さんの確にやつてくれるので

言葉の障害はなく、あの夢にまで見たあこがれのマエストロ・カラヤンと、いきなり直接やりとしている気分になった。

第九の冒頭のティンパニのアインザツをひとフレーズ叩くと、

「音程が悪い！ Aの音が低いよ」と言いつつ、

「アー」

と、その独特の囁れ声で長く延ばして歌いながらAのティンパニをじつと指差すので、さつそくペダルを踏んで調整する。

「オーケー、もう一回。よろしい。つき第二楽章！」

こういう具合でしばらく続き、
「今度は私の四拍子の指揮に合わせて、四分音符から三十二分音符まで、途中三連符、五連符、七連符と入れながら往復しなさい」という注文。ゆつくりとなめらかに動くカラヤンの右手を見ながら注意深く音符を叩くが、時々テンポが変化するのは、自分の指揮にどこまで合わせられるか、こちらの柔軟性をチェックしている様子。

その後、小太鼓でボレロをやらされ、

続いてシンバルのピアノとフォルテ。シンバルではまたカラヤンが指揮をして、チャイコフスキーの四番のフィナーレのコーダをやらされた。ちよつとふざけたようなすさまじいアツチェランドに合わせてベルリンフィルの重いシンバルを打ち鳴らし、本当は楽譜には無いのに、カラヤンのレコードでは付け足されて叩いている一番最後の音も思い切つて「ジャーン！」とやると、カラヤンがニヤリと笑つて軽くウインクし、

「ダンケ！」

とひとこと言つて、近くの座席に置いていた上着を肩にさつと引つかけると、駆けつけてきた他の団員と安永さんを交えて少しだけ何か話し、ホールから消え去った。そしてその場で、

「合格おめでとう。ベルリンへは出来るだけ早く来るように、とのことですよ」と安永さんから言い渡されて、はつと目が覚めた気がした。

入試も含めて試験演奏の経験は何度あったが、このような事はなにもかも初めてで、そのうえ自分でも意外なほど落ちついて実力以上のものが出せた気がしたのは、思えばカラヤンのカ



カラヤンの指揮でベルクの3つの管弦楽曲の練習中にフォルテの衝撃音に合わせて指揮者の高岡健（カラヤンアカデミー同期生）が盗み撮りした一枚。私もカラヤンのプロローベで写真を撮ろうとしたことがあるが、カメラを持ち上げただけで「止める！ シッシ！」とやられてしまった。

羽

田発モス
クワ経由
のAエ

に着く頃だった。

ロフロート便で、飛行機というものに生まれて初めて乗ってベルリンへ旅だったのは、それから数カ月後の一九七八年の春。

体験することのすべてが新鮮で、毎日が面白くてたまらない日々が過ぎ、ベルリンフィルのエキストラの仕事にも少しずつ慣れ始めた初夏の頃に、ベルリンをしばらく留守にしていたカラヤンが、スイスとフランスの演奏旅行の準備のために、フィ

ルハーモニニーホールへ戻ってきた。今回のピータは私にも初参加が許されて、ブルックナーの七番のトライアングルとムソルグスキーの《展覧会の絵》の小物打楽器のパートを受け持つことになった。

ブルックナーのプロローベが始まると、ついに初めて生で体験する重厚で輝かしいカラヤンサウンドに、感動で鳥肌

リスマ性以外の何物でもなかった。まったく信じられないほど事がうまく運んでしまい、頭はボーッとして足はふわふわ地に着かず、音大から特別に借りて持ってきたが、オーディションではついに使わずじまいの高級シンバル一組をケースごとどこかに置き忘れたのに気が付いたのは、その翌日に乗った帰りの新幹線がそろそろ東京駅

が立ちつばなし。

第3楽章アダージョのクライマックスで、シンバル奏者のレンベンスさんがアインザッツに備えて立ち上がったのにつられて私も立ち上がり、トライアングルを高く掲げて、全曲通じてたつた一回のフォルティシモのトレモロを叩いたまでは良かったが、指揮台のカラヤンは急に顔をしかめて、

「止める！ シッシッ！」

という感じで、右手の指揮は続けないが、左手でなにかを払いのけるような動作をした。何のことが分からず急に心細くなり、となりのレンベンスさんを見ると、「トライアングル奏者は立たなくていい、ということでしょう」と、事もなげに普通の顔をして教えてくれた。

このカラヤンの「止める！ シッシッ！」は、彼にとつて何か少しでも目障り耳障りなことがあると発せられる独特のしぐさで、あまり深い意味はないことが後で分かったが、最初のプロローベの一回きりのアインザッツでさつそくこれが出て、すっかり肝を冷やしてしま

チ

ユーリヒとバリで演奏されたカラヤンの《展覧会の絵》は超豪華版で、舞台空間に色彩豊かなさまざまなファンタジーが広がり、思わず夢心地になって我を忘れ、いっしょに演奏してアプナイことが何度かあった。

クレツツアアの明るく柔らかいトランペットのソロでゆるやかにプロムナードの幕が上がり、曲が変わることに、カラヤンとベルリンフィルはその曲の

雰囲気深く集中して曲そのものになりきってしまい、曖昧な表現はひとつもなく、みんなでいっしょに地下へ降り、古城をめぐる、(タニエル・デファイエの)ところけるように素晴らしい極上のアルトサクスのソロ！ 特別契約のエキストラで同行した彼の番は、一週間のピータで約五分のソロを二回吹くだけで、ギャラは噂によると百万円だったとか。なんという贅沢！ コツホのオーボエからは本物のヒヨコがつぎつぎと生まれ落ちてステージの上を走りまわり、パーバ・ヤーガの恐ろしい妖婆に追われて息ももたらがらたどり着いて見上げた壮麗なキエフの大門は、強力無比な金管群と打楽器群の集中砲火を浴びて、ついには大音響もろとも崩壊してしまふ、という大スベクタクルだった。

飯島泉 クラリネット・リサイタル 3

Izumi Iijima Clarinet Recital 3

飯島泉 clarinet. 藤原真理 cello. 清水和音 piano.

ベートーヴェン 三重奏曲 第4番 変ロ長調 作品11「街の歌」
ブラームス クラリネット・ソナタ 第1番 短調 作品120-1
シューマン 幻想小曲集 作品73
ブラームス クラリネット三重奏曲 短調 作品114

12/19 sat. 19:00 QASISひろば21 音の泉ホール S・¥4,000 A・¥3,000
チケット〈大分公演〉(株)フォージ 0952-26-2352

12/23 wed. 14:00 カザルスホール 全指定席 ¥5,000
チケット〈東京公演〉日本アーティストチケットセンター 03-3294-9999



後援：日本クラリネット協会、ビュツフェランボン(株)、(株)セントラル楽器、アンドー楽器、大分合同新聞社
マネジメント：(株)フォージ、(株)日本アーティストマネジメント



ああ、
パウカー！
またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文
Tajiro Miyazaki
(バーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」

連載・第8回

日本公演に同行

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE 《Eidola: KNAUHS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

最

初は、ベルリンでの学業を終えてドイツのオーケストラに就職が決まるまでは帰国しない、との決意で渡独したのだが、カラヤンとベルリンフィルによる一九七九年秋の日本と中国公演に、打楽器を多人数必要とするプログラムの都合で参加が許された。在独だったの一年半で一時帰国することになったが、これを国際電話で九州の実家に知らせると、「あらっ、アンタ、もう帰って来るんね？」

と、驚いた様子。

「タトエ肉親二何事カアロウトモ、初心達成スルマデハ、帰国ノ必要ハ無シ」と、まるで明治時代の留学生の親のような覚悟で送り出した方としても、拍子抜けである。

一方、カラヤンとベルリンフィルは、一九七〇年代に入ってからだけでもこれ四回目の来日で、定宿の京王プラザに旅の一行が着くと、さつそくみんなであつて知つたる西新宿界隈に繰り出して、「この店のヌードルスープ（うどん）は旨いんだ」とか「いや、あそここのシャブシャブに行こう」などと、私などよりよほど詳しいベルリンフィル

ルの連中に案内してもらつたりした。

カラヤンは、お世辞ではなくて本当に日本が好きらしく、日本滞在中はいづれも上機嫌だった。ある日の午前中の練習は、ちょうどその前の晩に東京付近を通過した台風の話題が始まり、

「昨夜は強い風で、ホテルの部屋が船みたいに大きく揺れたね」

と、京王プラザの最上階に泊まっていたカラヤンが、身ぶりも入れて楽しそうに話すと、

「下の方の階は、残念ながらいしたことありませんでした」

「お部屋が高級になるほど、揺れ方も激しかったようで……」

「えっ、オレの部屋はたくさん揺れたぞ！」

などと、前の方の弦楽器奏者たちが、すかさずドイツ的な渋いユーモアでまかせます。

みんなといったしに声を上げてひとしきり笑っていたカラヤンは、急に顔を引き締めて、

「SO!（さあ!）」

という短いかけ声とともに両手を高く広げ、一瞬のうちに音出しの準備が整ったオーケストラ全体を一瞥すると、

マーラーの「悲劇的交響曲」の冒頭を、力強く振り始めた。

マーラーの6番は、カラヤンの膨大なレパートリーのなかでは新しく、また技術的にも複雑な曲なので、練習はいつになく念入りに行われた。私は大太鼓と鞭の音の効果を出すササラなどのパートを任せられたが、カラヤンのテンポはいつも微妙に変化するもので、「ここ一発!」はまだしも、リズムをオケと合わせる時などに音がズレることがあり、するとすかさず、

「そんな簡単な譜面なんか暗譜して、カラヤンの棒をしっかりと見て叩け!」

と、フオーグラ先生叱責が飛ぶ。

合

計十二曲を八回のコンサートにプログラム分けした日本公演では、四曲が乗り番で、《展覧会の絵》はすでに何回もやつていたので楽勝。

ベートーヴェンの第九のトライアンフパートは、初めて演奏したが、ご存じ第四楽章の後半だけなので、それまで舞台の上でドラマチックな演奏をたつぷり鑑賞した後、

「ブツ。ブツ。ブツ、ブツ、ブツ」

という、ベートーヴェンの大真面目な冗談を思わせる、大太鼓とコントラファゴットの低音のピアノシモのスタツカートで始まる行進曲のテンポが決まった頃に、相棒のシンバルと示し合わせてそつと演奏を始めればよく、その後また音楽鑑賞の休憩が入り、いよいよフィナーレのどん詰まりのプレストで、例のお囃子の鳴り物騒ぎを、急に火が付いたようにみんなといっしょにワーツとやらかして、終わり。「合唱団も含めて、この晩の出演者の中では、絶対に一番楽なパート」と、密かに誇れる仕事だった。

ところが、ブルツクナーの《テデウム》の本番では肝を冷やした。カラヤンがブルツクナーをやる時は、音響を効果を狙ってティンパニパートのローンをいつも二人で叩かせるのが通例で、この晩は私が第二ティンパニを任せられたが、練習は一回で、しかも全曲通さなかつたので、一カ所ティンパニのフォルティシモのロールのアインザツツがよく判らず、カラヤンの棒が上がつたので、とりあえずバチを振り上げて叩こうとしたら、何と予期せぬオケ全体のアフタクトがドンと先に出て、

年内無休、'99年は1月3日より営業
管楽器フェア

'99年1月17日(日) まで

★比べて下さい。
ゴールドプレート！

・NHK交響楽団首席トランペット奏者、関山先生の選定したバック180ML37GB、37GLを国内トップレベルの技術者・羽賀氏のもとで組み直し（金属ストレス解消、チューニング管調整等）ゴールドプレートいたしました。またUSAアンダーソンでの金メッキも入荷しています。ぜひお試しください。

本数限定 選べるGPマウスピース付き

販売価格 **¥330,000** (税抜)

★お試し下さい。Lボアは魅力的です。

・25ベルとのマッチングで、GB、GL、GLS、GBSと各材質を取りそろえてあります。
・65ベル、44パイプが今回新登場です。
(72ベル、43ベルも続々入荷します)

★油断ならないヤマハ83入荷。

・アトリエ仕様の83、オリジナル83選定可能です。
・83ゴールドプレート

販売価格 **¥268,000** (税抜)

★Dillonバック入荷します。

・スクーピングモデル入荷。
・リリーステンション済モデル入荷。

★マローンバック試奏出来ます。



A ボブ・マローンのリードパイプ、チューニングスライドが試奏出来ます。

B 国内でセットアップしたバックとマローン自身がセットしたバックも比較出来ます。

(ボブ・マローン)

★グロニッツ・ダブルチューバ、ヒュンペルモデル入荷。

予 告

12月～来年1月にかけてハンス・クロマツト中心にピッコロTPが充実します。ぜひお来店下さい。

●ご相談は下記まで!!●

山野楽器

ウインドクルー
03(3366)1106

〒169-0073 新宿区百人町1-11-22
(年内は無休です)



1979年10月の日本公演（普門館）のマーラーの6番には、トランペットの松田さん（現札幌ノトランペット右から5人目）やトロンボーンの神谷さん（現N響ノトロンボーン左から二人目）も参加した。このときのベルリンフィルの管打の楽員約40名のうち、現在も在籍しているのは約10名で、この19年間に管打楽器だけで30名ものフィルハーモニーに入れ替わったことになる。打楽器左側の太鼓の席に筆者。（上の写真は「音楽の友」1979年12月号掲載のものを転載）

マラーの六番の本番では、その約九十分の演奏の間に、人生が変わってしまうような体験をした。

約百二十人の選り抜きの音楽家たちが、最高の指揮者のもとに力

急ブレーキ！目の前が一瞬真っ白になったが、そのまま体勢を立て直す間もなく、「ちよつと遅れたが、決して間違いいではない」というタイミングでドバーツと次の拍に入ったら、合っていたので、助かった。しかし「もし、あそこで一人で力いっぱい叩いていたら……」と考えると、そのたびに冷や汗がドツと吹き出て、その後、二、三日は眠れぬ夜が続いた。

を合わせ、その芸術表現の究極を尽くしたら、いったいどうなるのか？ しかも出し物は、マラーの六番という超エキセントリックな大曲。

全身に集中力を漲らせた七十一才のカラヤンが、早足で登場して指揮台に立ち、そそくさと客席に頭を下げたかと思うと、素早くオーケストラに向き直って、「突撃！」の指令を下す。それからもう、地獄の阿鼻叫喚と天国のお花畑の間をめまぐるしく往復し、寄せては返す官能の波に激しく揺さぶられ、グロテスクな諧謔に嘲笑されながら、自らも必死で演奏に加わった。

ようやく少し静かになった第三楽章アンダンテで、ちよつとしたアクシデントが起きた。カラヤンがある小節の一拍目を振った時に、ステージの天井のライトの電球が突然破裂して、「パン！」というビストルを発砲したような衝撃音がし、カラヤンも含めたオケ全員が「ギクツ」と身を縮めたのが二拍目。しかし音楽は止まることなく、そのままのテンポで三拍目が横に大きく振られ、四拍目でカラヤンが平然と身を起こした時は、すでに災難は去つ

ていた。何という臨機応変で冷静な親方根性だろう！

そして演奏は、とうとう最後のAモールの死の一撃の和音に行き着いた。

長大な曲の終わりを予感させるディミヌエンドの最後の音が消えると、覚悟を決めた顔色のカラヤンの両腕が、ゆつくりと上がって伸び切り、低い唸り声とともに、渾身の力を込めて振り降ろされた……。

「……誰も出ない！」

カラヤンの全身がブルブルと震え、膝近くで固く握りしめられた両の拳が、たまりかねてパツと開かれたのと同時に、百二十人のオーケストラ全員による最強音のトゥツティが、雪崩を打って爆発した。

この、実はたった三秒ほどの間に、大太鼓のバチを構え持った私の魂は、あまりの緊張に肉体を離れて地球の周囲をぐるぐると何度か飛び回り、ついになにもかもが終わって、沸き上がる観客の拍手を耳にして初めて身体力がガクツと抜け、それと同時に私はほぼ廃人化して、しばらくは口もきけなかった。



ああ、
パウカー！

またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文

Tajiro Miyazaki
(パーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」

連載・第9回

トラブル続きの中国公演

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE 《Eidola : KNAUHROS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

東

京に約二週間滞在した日本公演の後、カラヤンとベルリンフィルの一行は、次の目的地北京へと旅立った。もちろん歴史上初めての中国公演なので、ドイツと中国の国際親善や文化交流の意味あいも深い訪問である。

大きな団体の旅行にはなにかとトラブルやアクシデントがつきものだが、今回はそれが夜の北京空港に到着してすぐに起こった。

信じられないことだが、北京空港にはジャンボジェット機用のタラップがその頃まだ準備されておらず、上海空港から急ぎ運んで間に合わせたまではよかったが、使い方が分かっていなかったらしく、まず最初にカラヤンがタラップを降りたのに続いて乗客の半分ほどが降りた時に、タラップの最上部の床が突然抜けて、二人のフィルハーモニカーが七メートルの高さからコンクリートの地上に落下してしまった。一人はオーボエのコツホさんで、もう一人はチェリストだったが、二人とも

重傷を負い、救急車で病院へ運ばれた。二日後、カラヤンの紹介によるチュールツヒの専門医のところへ特別機で移された。

ちなみに私はずっと後方の座席だったので、その事故後一時間ぐらい飛行機内で待たされ、ようやく安全が確認されたタラップをみんなに続いて恐る恐る降りた。バスで運ばれた空港ロビーは騒然としていて、事故に遭った二人の身の上を案ずるカラヤンが真つ青な顔をしてロビーの中を行ったり来たりしていたのと、目の前を歩いていたコツホさんに続いて危うく落ちるところだった、というクラリネットのライスターさんの茫然自失とした姿が印象的だった。

思わぬアクシデントで予定が遅れ、一行が数台のバスに分乗して北京ホテルへ着いたのはすでに深夜近く。幅が広くてセンターラインが引かれていない道路の真ん中をバスが走るので、始めは右側通行なのか左側通行なのかよく分からなかったが、時々対向車が来

ると半分以上は右側へ寄って避けるので、恐らく右側通行なのだろう、という未知の国へやってきた緊張感を含んだ話題で、バスの車中が奇妙に盛り上がった。

翌日は午前中からさつそくプロローブだったが、六日間の北京滞在中に行われた三回のコンサートのうち、乗り番は一曲のみだったので、私はいつもオーケストラと行動を共にしながらも、気楽な見学者を決め込んでいられた。演奏会場は約六千人収容の大きな体育館で、数日前からドイツの専門技術者たちが入ってステージ作りや音響改善などの準備をしていたという。

さ

て、にわか作りのステージにオーケストラが全員乗り、カラヤンも指揮台に立つて音出しの用意が整ったところで、会場のざわめきが急に気になり始めた。実はこの日の練習は、カラヤンの前例のない超特別サービスで一般公開されたのだったが、プロローベの開始時間が過ぎて遅れた人たちがどんどん会場に入ってきて来るばかりでなく、いつまでもあちこちで大声のおしゃべりとか挨拶など

がにぎやかに交わされており、早めに来て席に座っている聴衆といえは、みかんを食べたり、女の人は編み物をしていたりで、オーケストラとカラヤンはあきらかにカルチャーショックを受けた顔色で困惑している。さすがのカラヤンも、相手がこれだけの多勢では「止める！ シッシ！」どころではなく、とりあえず通訳の中国人の若い女性に頼んで、静粛を呼びかける場内アナウンスをしてもらおうと、ひとまず静かになったので、カラヤンも気を取り直し、ブラームスの一番の冒頭を振り始めた。そして曲がオーボエのソロ（コツホがケガをしたので、この時はまだエキストラで旅行に参加していたシェレンベルガーが、中国公演のすべてのソロオーボエパートを吹いた）の静かな部分にさしかかると、会場のざわめきがまた大きくなり、ついにカラヤンがオーケストラを止め、癪癪玉を爆発させて、「うるさい!!!」

とドイツ語で怒鳴った。数カ国語に堪能なカラヤンも、さすがに中国語は出来ない。通訳の若い女性が、かわいそうに顔を蒼白にしてオロオロと走り回り、ふ



たたびマイクを握ると、今度はカラヤンの気迫を受けた強い調子で、場内に何度もカン高く静粛を呼びかけ、ようやくまた静かになったところでプロローベは再開された。それ以後、またざわめきが聞こえてくることも何度かあったが、しかしカラヤンはもう二度と怒らなかった！

三回のコンサートはみな超満席の大



約6000人収容の体育館で行われた北京公演。文化大革命による長年のタブーがようやく解け、それまでは厳禁の演劇芸術とされていた西洋音楽を求めて聴衆が殺到した。初日のブルームスがうまくいってご満悦のマエストロと、その世話係の二人のステージマネージャー。一人は指揮で汗をかいた身体を冷やさないためのコートをかかえ、もう一人はタオルと整髪ブラシを持って待機する。



迎賓館のレセプションで北京中央管弦楽団の打楽器メンバーと。彼らとは友好を兼ねて「展覧会の絵」を合同演奏したが、彼らは叩くタイミングが恐ろしく早く、しかも音が強烈に硬く、ゲネプロで一度通しただけの本番では大幅にズレまくって大混乱を起こしたが、演奏が終われば国際友好の破顔の笑顔で、なにこともなかったようにみんな何度でも何度も両手で熱い握手を交わしたのだった……。

日本では座布団も数かずの畳に正座して日本食を楽しみ、中国では絶妙なハシ使いを披露してまわりの人を驚かせるなど、マエストロは音楽以外のパフォーマンスでもいつもサービス満点。繰り返される茅台酒の「乾杯（ガンベイ！）」にも気持ちよく応じていたのが多くの席からもよく伺えた。



盛況で、しかも日に日に盛り上がりを見せ、最後の晩には北京中央管弦楽団の弦楽器のメンバーが四十人も参加してベートーヴェンの第七交響曲をいっしょに演奏したが、カラヤンはシンボリックな合同演奏だからといって手を抜くようなことはせず、ゲネプロでは時間いっぱい練習しただけでなく、オーケストラ演奏会のテレビ録画に馴れていない中国のテレビ関係者に実地の

技術指導までした。そして本番では、狂乱の酒神バツカスの化身となってティンパニを叩きまくるフォーグラース生の手も、「もう、これ以上まわりません！」というほどの速いテンポによるエキサイティングなフィナーレで全曲を強烈に締めくくりに、演奏終了と同時に、六千人の観客全員がはじけるように立ち上がったので大喝采を浴びた。前日の万里の長城や十三陵の観光で、すっかり旅行気分浸っていたオーケストラのメンバーに、こうして最年長者のマエストロ自らが全力を振り絞って、新たにプロ根性の活を入れたのだ。



マウスピース 注文製作 カスタマイズ
金管楽器 カスタマイズ

工房アイルリッヒ

IsleRiche Custom Mouthpieces

川口市芝西1-1-24-104

Phone (048)262-8795 Fax(048)262-8794

E-mail: isleriche@ro.bekkoame.ne.jp

http://www.bekkoame.ne.jp/ro/isleriche/

! Tp, Tb マウスピース、GWモデル、舶来楽器「シアズ」にて好評発売中!



ああ、
パウカー！
またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文
Tajiro Miyazaki
(バーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」 ゴツドフアーザー

連載・第10回

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE (Eidola : KNAUHROS,
weiland Pauker) 『かつてのパウカー』

約

一カ月の長期におよんだ日本と中国の演奏旅行も終わり、ベルリンへ帰り着いてしばらくすると、年も明けて一九八〇年となり、二年間のカラヤンアカデミーの留学期間も、すでに終わりに近づいた。

しかし、その頃よりようやくフオーグラ先生のお許しも出て、オーディションを受け始めた私としては、むづかしいとは知りつつも、チャンスがある限りはこのまま続けて、いつかはこちらのオーケストラへ就職したかった。

そういう私の願いを、フオーグラ先生とカラヤンは快く受け入れてくれ、「仕事が決まるまでは、無期限でアカデミーに在籍してよい。もちろん、その間も奨学金は出す」という特別処置をほどこしてくれたので、留学生のいちばんの心配事である、滞在ビザと経済的な問題がひとまずなくなり、こころおきなく自分の勉強やエキストラの仕事をしながらか、オーディションを受け続けることができた。

それから約一年半の間に、ドイツ各地とスイスなどで十三回のオーディションを受け、(詳しいお話は、また稿

を別とします) ついに現在のバーゼルのポジションに受かつてはつとしたのもつかの間、そこには最後の難関が待ちかまえていた。

外国人の私を合格させたことで、それを不服とする、オーディションに最後まで残っていた地元バーゼルのスイス人の応募者が、町の実力者であるその父親と、彼の音大の先生と組んで裁判所に異議を申し立て、オーケストラと主席指揮者が私を採用することを決めたのに、オケの事務所側では、裁判所と繋がっている外人警察が労働ビザを容易におろさないの、一度は契約書を交わしておきながら、後になつて私の採用に難色を示し、場合によつてはオーディションをやリなおす、という事態にまで発展してしまつた。

ちょうどそのころ、私はカラヤンアカデミーの学生としては最後の仕事でザルツブルクとルツェルンの演奏旅行に参加しており、フオーグラ先生とも毎日顔を合せてバーゼルの件について話し、オケの事務所にも何度か電話を入れてもらったが、師匠の顔色は冴えず、いろいろと考えた末、ここはスイスとも関係の深いカラヤンに、ル

さ

ツェルンに着いてから相談するのが一番良からう、ということになった。

で、それは秋も近いさわやかな晴天の八月末日のこと。ルツェルン湖畔の芸術会館で行われた午前中のブローへの休憩時間に、フオーグラ先生と私は、予約も入れずに、マエストロの控え室を訪ねたのだった。

その時は珍しく付き人も他の訪問者も部屋におらず、マエストロは一人静かに休息中で、大きな肘掛け椅子にゆつたりと座つたまま首をかしげてこちらを見、突然のお邪魔を詫びるわれわれ二人を、

「ああ、フオーグラさん。Bittel (どうぞ) と、機嫌よく部屋へ招き入れた。

ルツェルン湖の美しい景色が望まれる窓辺近くに座つていたマエストロに、師匠に続き腰をかがめて握手の挨拶をすると、マエストロは私の頬に手を伸ばし、おじいさんが孫にでもするようにピチャピチャと軽く叩きながら、

「どうだ。元気でやつてるか？」

と、やさしく気合いを入れてくれた。マエストロはこの日の訪問には慣れており、われわれ二人の顔を交互に見るとすぐに察して、

「なにか、私にやれることでもあるのかね」

と自分から切り出したので、師匠もさつそく、バーゼルのオーディションに私が受かつたこと、異議の申し立てのこと、それによつて労働ビザがおりないことなどのいきさつを説明した。そのたびに、マエストロは自分のことのように喜んだり、急に顔色を変えて怒つたりしながら、話を最後まで聴いていたが、

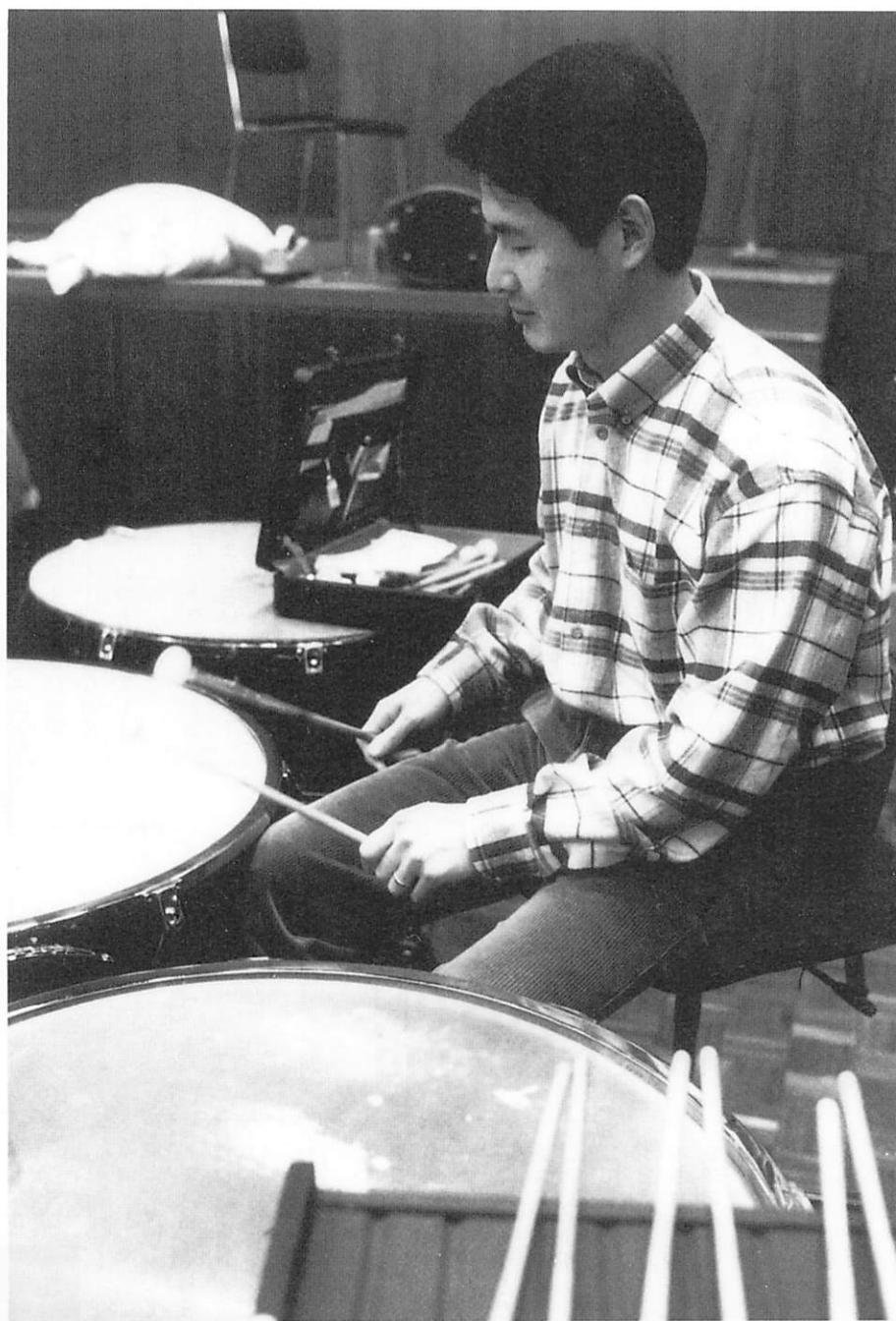
「で、契約書はあるんだね？」

と、低い声で一度念を押したあと、

「よし、わかつた。私の生徒に対するそういう不正は、許してはおけない。こうしよう。『もし彼に労働ビザを出さなかつたら、今後スイスでのコンサートは、いつさいやらない』ということとを、ここの音楽祭のマネージャーに伝えておく。これでいいかね？」

と、われわれを安心させるように微笑みながら、すらすらと言いつつ、

「はっ、ははーっ!!!」



バーゼルのオケの練習場にて、自作のバチをあれこれ試奏中の、まだ新米パウカーの頃の筆者。仕事となれば、たまには辛いこともあるけれど、ティンパニを演奏すること自体は、これはもう楽しくて、やめられません。

大恐縮、最敬礼、といった感じで、冷や汗をかきながらマエストロの部屋を退出すると、

「聴いたか、オマエ。こりやあ、オオゴトになったぞ！」

と、フオーグラール先生が興奮して叫びながら、私の背中をいきなりドン、とどやしつけたので、思わず私は咳き込み、階段を駆け落ちそうになった……。

……夕方のコンサートの前になり、

タキシードを着たルツェルン音楽祭のマネージャーらしき紳士が、事の真相と該当者を確かめるために、蒼い顔をして楽屋裏のわれわれを捜しにきたことは、いうまでもない。

ル

ツェルンからみんなといつしよに飛行機でベルリンへ帰り、残った雑用を片づけると、

私はすぐに、今度は夜行列車でスイスへ戻った。ゴタゴタが起きる以前に交

わしていた契約書にしたがつて、バーゼルでの仕事を早々に始めるためである。

バーゼルの仕事場では、新しいオケの同僚たちからあたたかい歓迎を受けて、とても嬉しかった。よく事情を訊いてみると、うちのオケ（当時のバーゼル放送交響楽団。後にバーゼルのもうひとつのオケと合併してバーゼル交響楽団となる）の団員のなんと三分の二は外国人で、国籍は約十五カ国に及

び、第一ヴァイオリンのほぼ全員がみな違う国の出身者、という超変則的なオーケストラで、（ちなみに弦楽器は全世界混合チーム、管楽器はフランス式にドイツ式が混じり、打楽器はドイツ式）私の件も、外人飽和状態のオーケストラを良く思わぬ地元の外部音楽関係者による、すでに前例のあるアクションなので、あまり気にせずに仕事を続けて、このまま既成事実を作ればよい、と慰めてくれる同僚が多かった。

こうして労働ビザがないまま、いわば不法ではあったが、念願のソロ・パウカーの楽しい仕事が始まり、夢中で日々を送るうちに三カ月が過ぎて、ついに労働ビザもおり、スイスの滞在許可証も手に入れることができた。

「ホーラね。そのうちに、みんなうまくいくと思っていた」と
と、同僚やまわりの人は、このときみな口々に言ったが、私としては、やはりあのカラヤンの親身な《出勤》が後ろ盾となつて、強力に作用したからだ、と思いたかった。

一年の試験期間も無事に終わり、ようやく少し落ちついた夏休みに、私は遅まきながら、感謝の気持ちとこれからの抱負を述べた短い手紙を、マエストロに宛てて書いた。

拙いドイツ語で、それでも一語一語念入りに辞書を引きながら、あの、いつも超多忙で、雲の上の人のようなマエストロ・カラヤンに、秘書の検閲をうまくぐり抜けて、ちよつとだけでも読んでもらえることを祈りながら。



ああ、
パウカー！
またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文
Tajiro Miyazaki
(バーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」 エピソード

連載・第11回

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE《Eidola: KNAUHHROS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

ベ

ルリンからバーゼルへ移り住んで仕事を始めてからも、私は機会あるごとに、カラヤンとベルリンフィルを体験していた。それは毎年恒例のルツエルン音楽祭を始めとしたスイス公演が多かったが、なにか特別なプログラムがあれば、休みを取ってベルリンまで聴きに行つたし、ふたたびエキストラとして演奏に加わることもあった。

いままでは、仕事か勉強でベルリンフィルを体験することが日常だったが、スイスへ来て初めて、チケットというものを予約購入し、一人前の観客として、ベルリンフィルを聴いた。

珍しくネクタイなどをきちんと締め、うす暗い楽屋口ではなく、シャンデリアの輝く正面玄関からコンサートホールへ入って座席に着き、ステージいっぱいに乗った懐かしいベルリンフィルを眺めた時に、私は自分の音楽学生時代がすでに終わっていたことにあらためて気がつき、感慨を覚えた。

響きのとても良いチューリッヒの音楽堂で聴くカラヤンとベルリンフィルのブラームスの二番は、音楽がずつしりと安定したうえで楽々と自然に流

れ、極上のものをつぎつぎと味わう陶酔感で身心ともたつぷりと満たされ、コンサート終了後も、しあわせな気分が長く残った。

あ

る年の秋には、アメリカ公演のエキストラを頼まれて同行した。プログラムは、ブラームスのシンフォニー全曲と、R・シュトラウスのアルプス交響曲、それにマラーの九番という重厚なもので、ニューヨークとロサンゼルスで同じ曲目を四回に分けて演奏した。

カーネギーホールでの演奏会はもちろん満席だったので、私はまた学生心を起こし、どこからか見られてもおかしくないようにエンビ服を着、ティンパニと金管が乗ったステージ山台のいちばんうしろとステージの壁のあいだの低い隙間に入り込んで、打楽器は降り番のブラームスを三曲聴き、四番ではちよつとお願いして、三楽章のトライアングルを叩かせてもらった。パウカーの仕事が始めてからは、トライアングルを演奏する機会が少なくなつたが、曲目はなんといってもブラームスの四番。この超名曲のトライアングル

パートほど、無駄なく効果的かつ魅力的に書かれたものは少なく、(しかも結構ヤバイのだ!) ティンパニを演奏する師匠のとなりに座つて、ひさしぶりのスリリングなトライアングル演奏を、心から楽しんだ。

R・シュトラウスの作品は、カラヤンとベルリンフィルのもつとも得意なレパートリーである。日本にいた頃はR・シュトラウスをライブで聴く機会は少なく、ほとんどがレコードだったので、当時の浅薄な音楽批評家達の悪影響もあり、私はR・シュトラウスを表面的な標題音楽の作曲家だと思いつていたが、ベルリンでカラヤンの《英雄の生涯》とか《ツアラットラ》、ロストロポーヴィッチのチェロも加わつての《ドンキホーテ》などを聴くにおよんで、そのたびに「目からウロコ」が続出の体験をした。

ここでは、その情況描写的な音楽に秘められた、洗練されたユーモアとか色気、人生の苦味とか高貴なセンチメンタリズムといった「大人の味」を含んだ人間の感情世界が、驚異的な技術により、強い共感をとまなつて縦横に表現しつくされるので、聞き手は自然

とR・シュトラウスの総合的な「物語」の世界に惹きつけられ、その大仕掛けな音響的派手さとはうらはらに、意外にも内省的なロマンティズムを体験することになり、それはそのまま《アルプス交響曲》の演奏にもあてはまる。

この夜に始まって夜に終わる、アルプスの大自然をまのあたりにした卑小な人間の驚きや喜びや悲しみの感情をモティーフとした大曲を、こんなにすみずみまで、ていねいに心くばりを行き届かせた演奏で体験したことは二度となく、その嵐の場面では、カーネギーホールの天井も落ちるかと思われる凄絶な大音響にみずからも第二ティンパニを力の限り叩いて参加しながら、私は、ここまで音楽に全身全霊をあげて奉仕するカラヤンとベルリンフィルの崇高な姿に、ただただ感動していた。

そして、マラーの九番。

この曲を私はカラヤンの数年前にパースタインで体験して、圧倒的な感銘を受けていた。パースタインは、曲の細部にまで刻印を押すように自己の解釈を徹底させたうえで、彼自身が生死における人間ドラマの主人公とし



カラヤンの生前は未公開だったと思われる写真。アカデミー同期生の指揮者の今村能が、ザルツブルクの写真屋で偶然見つけて「これ、いいだろう」と分けてくれた一枚。われわれの知るカラヤンは、いつもこんな感じだった。

て完全に燃焼しつくす、というエネルギーで強烈なものだった。カラヤンは、音楽がどこからか、永遠のあなたから近づいてきて、また永遠のあなたへと消え去っていく、どんな人間も逃れられない「時間」というものの絶対的な力を、いま現在、生命と同時に進行している音楽表現において、瞑想的に暗示する、というような諦観の強いものだった。

約九十分にあたる幽玄な演奏がついに終わり切つて、熱狂的な拍手喝采の

続くなか、カーテンコールで何度か指揮台まで呼び戻された帰りがけに、舞台の袖の内側に置かれていた、聴衆からは隠れて見えないが舞台の上からはよく見える、ステージ係が使う小さな丸椅子にいきなりぼつんと腰掛けたまま、蒼ざめた顔でなにかに別れを告げるようにいつまでも茫然と宙を見つめていた、魂を抜かれたようにやつれ果てたカラヤンの姿を、私は一生忘れな

生

きたカラヤンの姿を最後に見たのは、彼の亡くなる一年前、ルツエルンでブラームスの一番を聴いた時のことだった。

遅目のテンポだが決して粘ることがなく、老巨匠のひと筆書き、といった枯淡な演奏に、私はふと感じるところがあり、曲が終わると拍手がまだ続くうちに席を立ち、急いで楽屋口へまわった。

コンサート完了後、両脇を二人の付き人に抱えられ、疲れ切った顔をして

出てきた八十歳のマエストロに声をかける勇気もなく、頭を少し下げて遠くから目礼していると、マエストロはこちらに気づいて一瞬微笑んだまま、待機していた黒いリムジンに乗り込み、夜の闇へと消え去った。

●●●

先日、ルツエルン（クンストハウス）の芸術会館が新しく立て直され、そのこけら落とし公演で、アバドとベルリンフィルがベートーヴェンの第九交響曲を演奏したビデオを観た。

バーゼルの劇場でベルディの《オテロ》の仕事を終えて帰宅し、同じ晩に録画しておいてくれたものを、ビールなど飲みながらぼんやりと眺めていたが、指揮者もオケもソリスト達も、みんなそれぞれ好き勝手にやっているというような、まとまりがなく、張りつめたものの少ない演奏に淋しさを感じ、すでに深夜だというのに、同じ曲目のカラヤンのライブビデオを引っ張り出して、観なおした。

そこには、その場のすべての人々の中心に立ち、合唱団とともに口を動かしてシラーのテキストを歌いつつ、神々しい光を放ちながら音楽に献身するカラヤンの姿と、そのすばらしい協同作業に集中して仕える演奏家達の高い姿が映っていた。

こうして、子供の頃テレビで初めて見たマエストロ・カラヤンは、その後の歳月を経てふたたびテレビの画像の人となり、これからもたくさんの思い出とともに、私の人生にさまざまな影響をあたえ続けてくれるだろう。



ああ、
パウカー！

またはティンパニストの休日

宮崎泰二郎 = 文

Taijiro Miyazaki
(バーゼル交響楽団首席ティンパニ奏者)

追想の「マエストロ・カラヤン」

連載・第12回

エピソード集

●タイトルのイラスト
PAUL KLEE《Eidola: KNAUHHROS,
weiland Pauker》「かつてのパウカー」

七

週間の夏の長期休暇が終わり、音楽シーズン再開のため最初のプロローベは、ザルツブルク祝祭劇場大ホールで行われた。

世界中の思い思いの場所で夏休みを過ごし、たつぷりとエネルギーを吸収して日に焼けた顔のフィルハーモニカたちが、ふたたび舞台狭しと並んで座り、楽器の調整や指ならしなどしながら、ひさしぶりに再会した同僚たちとの会話にも余念がない。

オーケストラ後方の山台には、ウィーン歌劇場とソフィア・ナショナルオペラの合同合唱団の大人数がずらりと陣取り、舞台の脇には、バンダとしてまだ演奏ポジションの定まらない、ミューンヒェンフィルやバイエルン国立歌劇場からのトランペット奏者たちがたむろしている。

人々の話し声と、さまざまな楽器による音階練習や楽曲のフレーズなどが交錯して入り乱れ、そこに、ティンパニや大太鼓の皮の張りぐあいを調整するリズムのない打音が、遠慮なく割り込む。

コンサートマスターが腕時計を見

て、もうよからう、とばかりに立ち上がり、オーボエ奏者に弓で合図を送ると、それまでの大音響による混沌が渦巻きに吸い込まれるようにして消え、天地創造の原初の単音「A」が、コッホさんのオーボエにより、懐かしい音色でおそかに奏でられる。

チューニングのセレモニーが静まったところへ、フレニー、バルツァ、カレラス、ダムといった顔ぶれの歌手たちとともに談笑しながら、カラヤンが、オーケストラの前へ姿を現した。

マエストロも日焼けした顔で澁刺としており、にこやかに再会の挨拶をすませると、さっそくソリストやバンダの位置をきばきと指示しながら、早く音が出したくてたまらない様子。すべての準備が整うと、

「さーあ、やるぞー」

と、大仕掛けなイタズラの効果をいよいよ試す時が来て、嬉しさを隠しきれない子供のような顔で、舌なめずりをしながら、マエストロは舞台全体をもう一度チェックする。

曲目は、ベルディの《レクイエム》より「怒りの日」。

カラヤンの両手が元氣いっぱい振り降ろされ、全オーケストラがフォルテイツシモの和音でそれに答えると、もなくレンベンスさんの大太鼓が、あの伝説的な「あと打ち」による地獄の審判のモチーフを、まがいなく世界最強の音量で叩き出し、これを初めて体験する人はみな跳び上がって驚くが、かつて知ったるベルリンフィルの連中は、自分の楽器をしつかりと弾きながら、片足でステージの床をリズムに合わせて踏み鳴らし、さっそくこれに加勢する。

マエストロの頬がピクツと引き攣るが、伝統的なこのオーケストラ・ジョークに中断されることなく「怒りの日」は荒れ狂い、一度音量が落ちると、ピアニッシモによる合唱のテキストの子音が、カラヤンの鋭く厳しい動作によって、不気味に強調される。

舞台上とバンダの十数本のトランペットが太い音色でこだましながら叫び交い、ティンパニ二台と大太鼓の轟音も加わった凄まじい不協和音が、目を剥いて恐ろしい顔をしたカラヤンの手によって断ち切られると、まずバス歌

手のダムが立ち、そのうちにバルツァが、カレラスが、フレニーが立ち上がって、それぞれ底力を秘めた、レクイエムなのに華麗さと技巧をきわめた歌合戦が、つぎつぎとくりひろげられる……。

こうして、プロローベといえども夢のような音楽の時間が、またたく間に過ぎ去ってゆくのだった。

あ

る日のフィルハーモニーホールでの練習中、どこから突然、ドリルを廻す工事らしい雑音が聞こえてきた。

カラヤンが驚いて指揮を止めると、舞台の袖に一番近いブルトのヴァイオリン奏者が、ステージマネージャーに事態を告げに急いでホールから出て行き、じきに戻ると、

「すぐに止めさせる、とのことです」

腕組みをしたカラヤンとオケ全員が、じつと我慢するうちにドリルの雑音は消え、みんなの顔が明るくなつて、練習はふたたび始められたが、すぐにまた同じ雑音が響いてきた。

「いったい、どうしたんだ？」

と、カラヤンが指揮を止めて声を荒げたので、また同じヴァイオリン奏者が、機械仕掛けの人形のように立ち上がった裏へ走る。

しばらくするとステージマネージャーが姿を見せ、

「ホールの管理局の手違いで、今日工事予定が入っており、『今しか時間がないので、絶対にやってみようのだ』と、エラそうな工事人のヤツめが、言うことを聞かんのです」

と、すまなそうに説明するやいなや、

「よし、私が行つて、話してみよう」

と、カラヤンが誰かに止められるまでもなくスタスタと歩き始めたので、ステージマネージャーは、あわてて彼の後に従った。

カラヤンがいったい何をするのか、残されたオーケストラはみな興味しんと小声でウワサしながら、いまだ続いている雑音に、今度はじつと耳を傾けている。

ドリルの音が突然止むと、誰かが、

「やつた!」

と叫び、両手で首を締め上げる動作をしたので、みんながドツと笑った。

オーケストラが談笑して待つうちに、片頬にギヤグを匂わせた表情のカラヤンが、ホールから出て行った時と同じ足どりで指揮台へ戻り、

「一件落着!」

と言うと、手をパンパンと二、三度はたき合わせてニヤリと笑い、オーケストラは、

「ブラボー、マエストロ!」

と、はやし立てて喜ぶ。そしてその後のプロローベは、いつもにも増していい雰囲気で行われた。

ステージマネージャーの後の話によると、その、音楽のことは何も知らない粗野な工事人は、小柄だが威厳のある、どこか普通でない感じの銀髪のご老人に、

「私はいま、このホールでオーケストラの練習をしている指揮者だが、あなたが、いまここでドリルを廻しているなら、ホールの中のわれわれ百人は、まったく仕事にならないんだ。音楽の練習。分かるかね? だから、頼むからあなたの仕事は、どうか別の時間にやつてほしいんだが……」

と、肩を抱かれるようにやんわりとさとされ、ステージマネージャーが最初に一人で注意しに来た時は、「そんなこと、オレの知ったことか!」と怒鳴り散らしていた強情者が、みるみる小さくなり、柔順に工事用具をかたづけ始めた、とのことである。

ところでこのお話、日本人にはすぐピンと来ますよね。ただし、付き人のステージマネージャーが、

「ええい、控えよ! こちらの御方は、畏れ多くも……」

と、もしやつていても、相手には多分通じなかつたところがちよつと違いますが……。

あ

ある日のプロローベで、R・シュトラウスの交響詩《死と浄化》を練習中、曲が中間部のドラが鳴る部分にさしかかると、カラヤンがふと思いついたように指揮を止め、

「ところで、あの『中国のドラ』は、どうした?」

と、打楽器奏者のシュルツさんに訊

ねた。

「中国のドラ」とは、先日中国公演の時に派手好みのカラヤンがひと目で気に入り、自分のポケットマネーでオケのために買入れた巨大なドラのこ

とで、(現地買入れのため安かつたらしいが、それでも約百万円したとか……)特別製のスタンドに釣り下げると高さが二メートルを超え、直径も普通のドラの倍ぐらいはあるシロモノだつた。このドラは一度メシアンの曲で使

用されて、ズービン・メータからとてもホメられ、二度目に使われた《カルミナ・ブラーナ》の練習中に、度を越したフォルティッシモの一撃で、なんと、もの凄いい音をたてて叩き割れてしまい、その時の指揮者リカルド・ムンティが、腰を抜かさなければなら驚いた。

「あの『中国のドラ』は、壊れました」

「なに、壊れた?」

理由はなにも訊かず、カラヤンは顎に手をあててしばらく考え込んでいたが、

「フム。まつ、ありえることだ」

とつぶやき、なにこともなかつたかのように曲の続きを振り始めた……。

ま

たある日の、今度はレコーディング中の出来事。

歌手を揃えて《トスカ》の第三幕を録音中、いよいよドラマも大詰めとなり、カヴァラドツシの処刑の場面あたりで、フォークラー先生が興奮してバチを高く振り上げ、力いっぱいティンパニのロールのアインザッツを叩き込むと同時に異様な音がし、

ロールの持続音が、雑音となつて途切れた。

カラヤンが驚いて指揮を止め、オケの全員がなにごとかと後ろを振り向くと、

「パウケの皮が、破れた……」

と、フォークラー先生が、破れた皮の裂け目にバチの頭を突っ込んで、わざとらしくガサガサとやりながら、しきりに首をすくめている。

一同がシーンとして見守るなか、目を丸くして棒立ちになっていたカラヤンは、急に「フツ、フツ」と身体を揺らして笑い、

「まつ、よくあることだ。休憩!」

と、両手を上げて、全員にお開きの合図をした。

ちなみに、著者がベルリンにいた三年半だけで、パウケの皮は五枚破れ

(本番!!で二回、録音中に一回、個人の練習で二回。著者が練習中一回破りました)あのお厚い太太鼓の皮も破れ

(《春の祭典》で。指揮は小澤さんでした)小太鼓の皮は三回破れ(一枚は《復活》で。シオルテイでした)タン

プリンの皮も一度破れて、すぐ隣りでいっしょに演奏中の著者の目の前に、

レンベンスさんの右手がタンプリンを突き抜けて飛び出た時は、とても驚きました。

えつ、本番中に皮を破つたら、その後はいったいどうするのかつて? もちろん、パート譜の残りを、最後まで責任持って歌います。というのは冗談で、いろいろなやり方が考えられますが、それは、みなさんのご想像におまかせいたします。